

小松帯刀なくして 明治維新なし

— 龍馬の活躍から薩長同盟へ —

前号のあらすじ

風雲荒れ狂う日本。1853年ペリー率いる米国の東インド艦隊の4隻が浦賀沖に現れた。西ヨーロッパは産業革命を終え、進んだ工業製品の輸出拡大競争に突入していた。この点、米国は出遅れていた。当時、欧米各国は工業製品をつくるためマッコウクジラの鯨油を大量に必要としていた。これには、長期航海用の食糧も含め太平洋での補給拠点の確保が必要であった。薩摩藩の次期藩主の島津斉彬^{しまづなりあきら}（注1）は江戸生まれの江戸育ち。海外事情はよく理解していた。ましてや琉球からの情報も報告を受けており、欧米列強により東南アジアや清国のごとく日本が植民地にされることに危機感を持った一人であった。日本の植民地化を何としても避けなければならなかった。

斉彬が薩摩の藩主になり、薩摩藩としてまず手をつけたのは富国強兵、軍制改革、殖産興業、人材育成であった。これを推し進められる人物は誰か。斉彬は人を見抜く勘は優れていた。島津斉彬や久光の信頼を得て、小松帯刀^{こまつたてわき}が抜擢された。小松は薩摩きっての秀才であり、若くして洞察力も兼ね備えていた。小松は下級藩士ではあるが信念において通じるところのある西郷隆盛、大久保利通を自らの手足として使った。斉彬と同じく家格など関係なく人材を登用した。この小松帯刀なくしては、薩摩が幕府をも凌ぐ藩として、のし上がることはできなかったであろう。



▲鹿児島にある西郷隆盛像

1 禁門の変

蛤御門^{はまぐり}の変とも言う。この門は「新在家御門」と言われ開かずの扉であったが、1788年の天明の大火で御所が炎上した折、初めて開門された。この為、禁門が「炎で貝が開く」ことの比喩で蛤御門（俗称）と呼ばれるようになった。

1864年に尊王攘夷派（長州藩）と徳川幕府（会津藩）の戦いが勃発した。原因は前年（1863）に遡る。池田屋事件である。

1863年長州寄りの公家七卿^{（注2）}が、攘夷を祈願するため天皇に神武天皇陵と春日神社への大和行幸を建議し布告した。しかし会津側は「長州寄りの公家は裏で討幕を計画している」と中川宮^{（注3）}に訴えた。それを中川宮が天皇に奏聞した。天皇は長州寄りの三条実美ら七卿の官位を取り上げ、参議の毛利慶親を解任した（十八日の政変＝七卿の都落ち）。孝明天皇

には討幕の意思はなく、行政機関としての幕府との共存を願っていたからである。

天皇の意思も知らない長州・土佐・肥後の尊王攘夷派は、都での失地回復を目論み時機をみて決起すべく、筑前の御用商人枅屋喜右衛門方に兵器類を隠したのである。しかし、この情報は新撰組の知るところとなり枅屋宅を搜索。結果、大量の兵器弾薬が見つかった。

京都守護職の松平容保(会津藩主)は、幕府に対して謀反の疑いありとして、長州藩士がよく使う池田屋に目をつけていた。1864年7月、長州を中心とした尊王攘夷派は「京都守護職松平容保襲撃の計画」を立て、具体的な打ち合わせのため密かに池田屋に集まった。このときを狙って容保は新撰組に池田屋を急襲させた。そのため、長州を主力とする尊王攘夷派の多くの志士が殺された。

運の悪いことに、この中に土佐出身で勝海舟、坂本龍馬が所属する幕府の神戸海軍操練所の塾生望月亀弥太がいたのである。軍艦奉行かつ神戸海軍操練所総裁であった勝海舟は、勝自身幕臣でありながら討幕を企てた者を訓練に参加させていた責任をとられ罷免されてしまい、また神戸海軍操練所自体も解散させられてしまったのである。ちなみにナンバー2としての塾頭は坂本龍馬であった。龍馬にとっても大きな痛手であった。

長州は、この池田屋事件の報復として軍を率いて上京し、禁門の変(蛤御門の変)を引き起こした。

禁門の変とは、長州の家老福原越後、益田右衛門、国司信濃が兵を率いて大坂長州屋敷に入り、待機中の久坂玄瑞、真木和泉ら尊王攘夷派と合流し、七卿の復権と藩主毛利慶親の参議罷免の取消しを求めた戦いである。

このとき、薩摩の小松帯刀のもとへ一橋慶喜より「皇居周辺より長州兵を退去させよとの朝命が下されたので、薩摩藩も出兵するように」と要請があった。このとき帯刀は「元々非常の節には皇居を警備するよう薩摩藩に朝命が下っているので、一橋公の命では出兵でき

ないが、朝命であれば出兵する」と、薩摩藩の立場を鮮明に打ち出している。

長州の兵力は3,000人。対する幕府軍約8万人。幕府軍の楽勝かに見えた。長州の国司信濃の率いる500余名は、蛤御門、下立売門、中立売門の三方面に攻撃を開始した。

中立売門を護っていた筑前と一橋の銃撃隊は、たちまちに敗れた。会津は下立売門を護っていたが、長州の猛将来島又兵衛による正面突破攻撃がなされ、会津はあえなく敗れてしまい、蛤御門も長州に占領されてしまったのである。一時的とはいえ、兵力差に劣る長州軍の士気の高さと兵器の違いが大ききものをいった。

その後、西郷隆盛の指揮する薩摩軍が幕府軍の援軍に駆けつけ、長州より一段と勝る薩摩の誇る最新式大砲四門と最新式のスペンサー銃の威力により来島又兵衛の軍を打ち破り、さらに薩摩の抜刀隊の突撃により形勢を逆転させた。幕府側は薩摩軍のおかげで三門(蛤御門、下立売門、中立売門)とも取り返すことができたのである。勇敢に戦った長州の来島又兵衛は自刃して果てた。

伏見方面の長州の福原越後は負傷して撤退。鷹司邸を護っていた久坂玄瑞、入江九一、寺島忠三郎の首領級が戦死した。これらの人が明治維新まで生きていたら一級の指導者になっていただろうに、実に無駄な戦いをしたものである。ちなみに久坂玄瑞の妻は今まさにNHK大河ドラマ「花燃ゆ」の主人公吉田松陰



▲幕末の薩英戦争でも英艦隊を砲撃した鉄製150ポンド砲(レプリカ)

の妹「文」であった。彼女も時代に翻弄された一人であったのである。

真木和泉は敗残兵を集め天王山に向かったが、益田右衛門の一隊は退却した後であった。真木和泉は「長州はことごとく敗れ、毛利公や多くの公家衆に対し申し訳ない。ここに至って自分の責任は断じて免れることはできない。残った諸士は帰藩して攘夷のため、皇国のため再起を願いたい」と述べて自刃して果てた。

こうして、禁門の変は薩摩藩のおかげで幕府側の勝利に終わったのである。

2 薩摩の近代化

1863年、薩英戦争で勝利を収めた薩摩は、小松帯刀の外交術により英国を味方に引き入れた。当時、世界最強と言われた英国艦隊を撃破したからである。

英国内では、国王への不信感が渦巻いていた。本来はこの情勢を見逃さず英国に対して賠償金を要求できたはずであったが、小松は逆に生麦事件の犠牲者の家族のために慰謝料を支払ったのである。ジョンニール駐日代理公使は、自分の立場を尊重してくれた小松帯刀に最新鋭の軍艦、大砲、鉄砲等の提供を約束した。いわゆる「損して得をとる」という事を帯刀はやってのけたのである。

前述した禁門の変での大逆転ができたのも、小松が英国より購入した兵器と弾薬が効を奏したからである。帯刀はこれでも満足せず、薩摩に軍艦の修理工場を造ろうとした。これには多大な軍資金を必要としたため、藩内でも反対論者が出た。伊地知壮之丞や松岡十太夫ら保守派の連中である。

松岡「小松殿、交易で軍資金を造り、軍艦、兵器を買わねばならぬ時にどうして莫大な資金を使って修理工場を造らねばならぬのか」

小松「松岡殿の言わんとされることはよくわかります。しかし、機械は必ず故障します。そのたびに、長崎に持って行って修理するのは時間も金もかかります。よって、我が薩摩に修理工場を造り、ゆくゆくは

自ら軍艦を自前で造ることを考えております」

松岡「そんな工場を造るより、どんどん新造船を買えばよい。そうすれば平時は交易船として使い、軍事の時には軍艦として使えるではないか」

小松「松岡殿のおっしゃることも、ごもっともだと思います。しかし、今、各藩が争って軍艦を購入しており相場も上がっております。いざというときに故障して長崎まで修理に出しては、間に合いません」

松岡「殿より全権を任されているとはいえ、すこし無駄に使っておるのように感ずるが、いかがか」

小松「将来、自前の軍艦を造り、修理もこの薩摩でできるようにになれば、何倍もの利点が生じましょう。私にお任せいただきたい」

と小松帯刀は言い放った。

彼のよいところは、私欲を持たず国に利すると思ったことは説得する粘りにある。この案件は、国父久光も藩主茂久も小松帯刀を信頼し彼の意見を支持なされ、蒸気船鉄工機械工場が造られたのである。そして、英国人を指導者とし、岩下新之丞と竹下清右衛門を登用し学ばせた。後にこの造船所が大活躍し、他藩が故障で修理にもたついている時でも自前で修理できるようになり、薩摩の海軍力は飛躍的に強化された。

すべて小松帯刀が存在したため、薩摩の武力、その存在感は幕府をも上回るものになっていったのである。

3 小松帯刀と坂本龍馬の出会い

小松と坂本の出会いを語らねばならない。

前述したように、討幕の談合ありとして襲撃された池田屋事件に、勝海舟の率いる幕府管轄の神戸海軍操練所の塾生、望月亀弥太が参加していた。幕府は同所総裁の勝海舟に塾生管理不行届として、神戸海軍操練所の閉鎖と軍艦奉行の罷免を申し渡した。

このとき、坂本龍馬は塾頭の役に就いていた。龍馬にとっても大きな代償であった。そこで勝は、以前より

知り合いであった薩摩藩の小松帯刀に、塾生を潜伏させてくれるよう頼みこんだのである。当時としては、幕府が手の出せないのは薩摩藩だけであったからである。他藩であれば幕府を恐れて断るのが必定である。けれども、小松はこころよく引き受けた。小松にも計算があったからである。薩摩藩では、まだ航海術を修得している者は少ない。これらの者を使わない手はないと考えたのである。軍艦を動かせる航海士を一気に手にいれたも同然であった。

その後、勝は幕臣であるため江戸に帰った。このとき残った浪士約30名足らずの塾生を仕切っていたのは塾頭だった坂本龍馬であった。帯刀は、はじめて龍馬と知り合ったのである。1864年11月のことである。

一方、西郷隆盛は勝海舟が軍艦奉行をしている時、勝より申し込まれて面談している。その時に西郷が大久保利通に宛てた手紙がある。要旨を簡単に言えば、「最初は適当に対応するつもりであったが、会ってみるとどれだけの知恵があるか判らぬほどの智者である。佐久間象山先生も、学問と見識とにおいては拔群ではあるが、現状分析においては幕臣とは思えぬ程の開化的な人物である。佐久間先生をも凌ぐ者とお見受けした。改めて勝先生に惚れ直しようとした」と書き送っている。

戊辰戦争後、江戸城総攻撃の直前の西郷と勝との

会談で「江戸城 無血開城」を西郷が受け入れたのも、前述の会談においての勝への想いが背景にあったと思われる。江戸城総攻撃決定後の「江戸城 無血開城」は、唯一、勝海舟でしか成し遂げられなかったに違いない。

京都の薩摩藩邸に匿われた坂本龍馬は、筆頭家老小松帯刀や西郷隆盛、大久保利通と幾度となく話し合いを持った。当初、龍馬は「攘夷、攘夷」と叫び、外国人を日本に入れてはいけな^さいとの考えであったが、勝に会って攘夷の愚行を悟っていた。

「おまはん、攘夷を主張するのは勝手だが、今の日本の軍事力で勝てるんかい？負ければ清国と同様に日本が植民地にされることがわからんかい、龍馬。今は交易をして外国と戦っても負けない軍艦、兵器、弾薬を備えることが先決と思わんか」

と勝に一喝された龍馬は、目からウロコが落ちる思いであった。龍馬は、弱腰で保身のみを考えている幕閣では、日本はいつか欧米列強の植民地にされると考えるようになった。この考えは帯刀も同様であった。

薩摩が当時世界最強と言われた英国艦隊に勝利したからこそ、英国は薩摩と同じ土俵での交渉テーブルについてきたのであり、帯刀は交易を優先し先進列強と戦うべきではないと考えていた。そこで龍馬は幕府を当てにせず、雄藩連合（薩摩、長州、土佐）を結成



▲島津家と徳川家の系譜



▲島津家伝来の甲冑

すべきと主張した。そして、公武合体論を主張し「日本の元首は天皇であり、天皇のもとに一致団結して事にあたるべし。内輪喧嘩は、欧米列強の思うツボである」と説いた。龍馬は勝のお蔭でまったく違う考えをもつようになったのである。

島津氏は平安時代の終わり頃に、摂関家筆頭近衛家の薩摩莊園を護る莊官として京より薩摩入りし、源頼朝に薩摩、日向の地頭として認められた経緯がある。その頃より、長きにわたり近衛家とは密接な関係を保ち続けていた。この関係で帯刀のような薩摩藩筆頭家老という陪臣ばいしんでも、近衛公の口添えのおかげで天皇に拝謁することが許されていた。幕府も小松帯刀に何かと朝廷との仲介を頼んでいた。

龍馬も小松帯刀の指示通りに動かなければ、何もできないことを痛感していた。また、英傑西郷隆盛や智謀弁舌の大久保利通を上手に立てながら要職につけ、その後ろで手綱を引いているのが小松帯刀であることも匿かくわれていてよく理解できていた。龍馬は、帯刀に何か自分にできる事はないかと申し出た。帯刀は龍馬に、「それなら龍馬、長崎に行って商売をせんか」と提案した。

龍馬「それはよいが、先立つ金がないがどうしてくれるんか」

小松「君が仕切る旧操練所の連中には、薩摩から給金を払う。商売に必要な金もすべて薩摩藩が出すから、薩摩のための交易商社を作ってくれないか」

龍馬は昔から商売がしたかったので、それならと二つ返事で引き受けた。早速長崎に行き、少々高台に商家を買い、交易船と軍資金を薩摩藩より借りた。これが「亀山社中」(後の海援隊)である。龍馬がつくったように書いている本もあるが、実は小松帯刀が龍馬につくらせた貿易商社であった。交易船の操縦ができる連中ばかりなので都合もよかった。

帯刀の紹介で、外国人貿易商人グラバーとも知り合えた。龍馬はこの「亀山社中」を拠点に雄藩連合に奔走するのである。

4 薩長連合

小松帯刀は討幕し、雄藩連合で公武合体の新政府をつくる構想を龍馬に話した。龍馬もまったく同意見であった。そこで、龍馬は小松の手足である西郷隆盛と大久保利通に面談を求めた。

龍馬「西郷さん、大久保さん、帯刀殿と相談して薩長連合の交渉に乗り出そうと思っております。そこであつしはこれから長州との交渉にいくつもりじゃきに、御兩人の意見ば聞きたか」

西郷「小松さんがよかとおっしゃれば、まったく異論はなか。幕府はもうあかん。長州と組んで新しい政府をつくる必要があり申す。それから、肥後の横井小楠よこいしょうなん^(注4)先生に相談され、それから筑前で五卿とも相談して長州との交渉に行かれるがよか」

大久保「長州では禁門の変からというもの、ひどく薩摩を憎んでおるそうで、我々ではどうにもうまくいかなのじゃ。仲立ち頼み申す」

龍馬と横井小楠とは、龍馬が勝の使いをしていた関係で旧知の仲であった。小楠からは薩長同盟についておおいに賛同を受けた。それから小楠の紹介状をもって筑前に行き、三条実美卿等に会い賛同を得た。そして、三条卿の紹介状をもって下関で桂小五郎(後の木戸孝允)と会談することになったのである。

長州は、下関戦争で列強四国連合艦隊に徹底的に打ちのめされ、攘夷実行の難しさを痛感していた。また、藩内には周布正之助の正義派が衰退し、穏健派である俗論派が台頭していた。穏健派は幕府に恭順けいそんを示した。このとき正義派の井上馨が俗論派に襲われた。瀕死の重傷を負い医者をつらい回しされていた井上を救ったのが、大垣出身の医者、所郁太郎である。所は手術用具を持ち合わせていなかったもので、手近にあった畳針で井上馨の傷口を縫合した。この効あって、井上馨は一命を取り留めたのである。出身地大垣では、所郁太郎の顕彰会が創られ活動している。

話を戻すと、正義派の高杉晋作は、下関で奇兵隊



▲現在「維新ふるさと館」(歴史資料館)がある加治屋町の近隣には、当時、西郷隆盛、大久保利通など幕末・明治維新の偉人が多く住んでいたことがわかる

を組織して挙兵した。そして、大田・絵堂の戦いで俗論派の率いる部隊と戦い勝利した。こうしてふたたび正義派が主導権を握り、討幕へ道を進みつつあった。

坂本龍馬は木戸孝允(桂小五郎)に薩長同盟の重要性を説明した。木戸はその重要性を認識しつつも、昔年の恨みが邪魔をしていた。龍馬は同盟を実現するため、木戸の本音に切り込んだ。

龍馬「木戸さん、このままでは腐った幕府の思うツボである。いったい同盟を結ぶにはどうしたらよいか、はっきり言ってつかあさい」

木戸「今、我が藩は外国商人と取引できない状況にある。よって、薩摩名義で軍艦、兵器の調達をしてほしい。これについて薩摩の了解が得られれば同盟に応じよう」

と条件を出してきたのである。龍馬は早速薩摩に帰り、帯刀にこの条件に応じてくれるよう懇願した。帯刀は、これで同盟ができるならと長州の条件を受け入れる返答をした。

1866年、龍馬は京都の小松邸にて、薩摩の小松帯刀、西郷隆盛、長州側の木戸孝允(桂小五郎)が一同に会する機会をつくったのである。これにて、ようやく薩長同盟が成立したのであった。次回はいよいよ大政奉還、戊申戦争である。



▲鹿児島にある大久保利通像

(注1) 島津斉彬…島津氏28代当主(1809~1858)。幕末の薩摩藩を近代国家に改革した名君。老中筆頭阿部正弘と幕政改革に参画。

(注2)公家七卿…三条実美(27歳 従三位権中納言)、三条西季知(53歳 正二位権中納言)、四条隆謩(36歳 従四位上侍従)、東久世道喜(31歳 正四位下左近衛権少将)、壬生基修(29歳 従四位上修理権大夫)、錦小路頼徳(27歳 従四位上右馬頭)、澤宣嘉(28歳 正五位下主水正)

(注3)中川宮……幕末から明治初期の皇族。

(注4)横井小楠…能本藩士。儒学者。松平春嶽の政治顧問。

〈参考文献〉

・「図解幕末・維新」 | 成美堂出版

・「小松帶刀伝」 宮帯出版社 瀬野富吉著

※文中の写真は筆者撮影

(2015.2.17) 共立総合研究所 特命研究員 三矢 昭夫